



プリント基板アッセムリーの専門メーカーが薬草の栽培生産へ。一見何の脈絡もない新規事業のようにも思えるが、製造業で培った生産工程管理のノウハウを植物の栽培に取り入れた「植物工場」と聞けばうなずける。自社の伸展とともに、地域の将来像まで見越した新規事業だ。

鹿角エヌ・シー・エル株式会社
代表取締役社長 高橋 健一氏



モノづくりで培ったノウハウを生かし新規事業

現在の事業が堅調なうちに
投資に値する新規分野を開拓

鹿角エヌ・シー・エル株式会社(KNCL)はプリント基板アッセムリーの専門メーカーだ。元々は東京に本社があった企業の生産部門で、昭和61年に鹿角市の第一号の誘致企業として現在地に進出してきた。当時の親会社はフィリピン、中国、マレーシアなどのアジア諸国にも生産拠点があり、のちに本社自体も香港に移転したことなどから、KNCLは平成15年に親会社から離れ独立企業になった。

大手の電子機器メーカーや電子部品商社を主要取引先にしており、高い技術力や提案力、多品種小ロットの小回りのきく生産体制で取引先の信頼は厚い。

本業は堅調に推移しているが、将来的にも持続可能な会社にするため、企業体力のあるうちに更なる投資をすべく、高橋健一社長は、5～6年前から新規事業に進出したいという思いを抱いていた。

しかもそれは、自社の収益確保という目的のみならず、会社が立地する地域の将来像を思い

描いたものでもあった。

「私自身が鹿角の出身でUターン組なのですが、地域の過疎化に歯止めをかけるとすれば、UターンやAターンの受け皿になれるような元気な企業の存在は不可欠だと思いました」(高橋社長)

製造業で培ったノウハウ応用
薬草を植物工場に計画的生産

これまでの事業で培ってきた製造業のノウハウを生かせる新規事業として最終的に絞り込んだのは「植物工場」だった。そこで栽培するのは漢方薬に使われる「甘草(かんぞう)」という薬草。

現在、漢方薬の原料は9割ほどを輸入に頼っており、そのうちの9割が中国からのもの。それが乱獲規制で高騰する傾向にあり、それならば日本の技術力で安く国内生産できれば商機があるのではないかという着想だ。

大手の農業資材商社と提携して栽培技術の指導を仰ぎ、種の供給も受けた(生育物は全量

買い取り契約)。昨年には秋田県の「あきた農商工応援ファンド事業」を利用してコンピュータ管理される2基の最新型育苗装置をリースで導入した。

中国では苗づくりに1年、それを地植えして2～3年で収穫しているが、KNCLの導入した生産手法では、育苗装置での苗づくりが1ヶ月、それを地植えして出荷するまで1～2年と、大幅に生産工程を短縮でき、ひいては生産コストを抑制できる。設備の稼働率が50%程度であることから、将来的には残りの期間で別の植物を栽培することも検討している。

自社の伸展のみならず
地域の発展につながる事業に

現在は試験栽培の段階だが、試験出荷した苗の品質の評価は高く、鹿角の水が栽培に適しているためとも考えられている。今年10月には苗の成分の分析結果が出揃い、ここで事業の成否に一定の見通しが見られる。

「アグリ事業と言っても、やりたいのは“農業”ではなく“採算のとれる農業ビジネス”。そのために生産工程表で管理するという本業のノウハウを応用して“モノづくり”の一環として取り組んでいきたいと考えています」(高橋社長)

ゆくゆくは地元企業とのコラボで甘草を使った商品の開発や、地元の宿泊施設で薬膳料理や薬草風呂に利用するといった展開も考えている。

郷土鹿角にかつてのようになぎわいを取り戻したいという“地元愛”が、高橋社長の新規事業に賭ける熱意のベースとなっている。

鹿角エヌ・シー・エル株式会社

〒018-5334	■創業/昭和61年
秋田県鹿角市十和田毛馬内字	■資本金/1000万円
南陣場56番地	■売上高/2億4000万円
Tel.0186-35-3911	■社員/57名
Fax.0186-35-3914	■事業内容/プリント基板
http://kncl.kaduchi.com/	アッセムリー



A コンピュータ管理された育苗装置の中で育つ薬草。
B 女性の多い職場。定着率は高く離職者はきわめて少ない。
C あきた農商工応援ファンド事業を利用して導入した薬草の育苗装置。
D トレイに植えられた薬草の種は育苗装置の中で一ヶ月育てられる。
E 多品種小ロットのプリント基板アッセムリーを得意としている。

